

# 【ねがいはしては】

平成29年7月25日

KYOWA SCHOOL

第321号

「叫び」

今回はある著作からの抜粋がほとんどになります。強烈な印象を覚えましたので・・・

—この三年間、私は中学生という肩書きでいたけど実際は違ったと思います。中学校なんか一ヶ月も通わなかったからです。小学校の頃から時々休んでいたけど、中学では一ヶ月通ったきり全くといっていいほど学校には行きませんでした。この三年間は私にとってはとても大切な時間だったと思います。—

灰谷健次郎さん（児童作家、代表作として『兎の眼』『太陽の子』など）の著作を読みながら出会った文の一部です。私は釘付けになりました。「学校へ行かずに大切な時間だった」とは？・・・続きます。

—中学に入ってから、急に時間がなくなってしまいました。それは慣れてしまうと思わなくなるかもしれませんが、私は慣れることができないように思いました。でも学校はそれなりに楽しかったです。それは勉強とかではなくて、授業中に先生に隠れてする友だち同士のおしゃべりや、手紙のやりとりでした。それはとても楽しかったんですけど、とにかく時間がなかったように思います。学校へ行っても、スケジュールが全部つまっていて、家へ帰るのは夕方です。そこでもう、私はとても疲れてしまいました。でも、宿題をやらないといけないし、私は塾へ行っていなかったけど、行っている人はどこに自由な時間があるんだろうとっていました。つまり、考える時間がなかったのです。勉強以外のもっと大切なことを、自分で納得のいくまでとことん考える時間がありませんでした。だから何かに疑問を持つような時間もなかったのです。だから私は、学校を休んでいる時はいつも何かを考えていました。—

—中学校は勉強についていけない子はダメというような、落ちこぼれというレッテルをはってしまって、まるで勉強ができないと生きていけないというような考え方を、意図的ではないにしても、知らず知らずのうちに植えつけてしまうようなところがあると思うのです。もちろん学校によっても違うだろうし、すべてがそういう学校だとは思いませんけど。でも少なからずそういうところがあるように思いました。—

—学校というか、私たちよりも長く生きている大人に教えてほしいのは、数学や英語だけじゃなくて、人間として大切なことが一番だと思います。私たちはまだ若いから、これからたくさん壁にぶつかったり、時には粉々に砕けてしまうかもしれません。そういう時に、マイナスからゼロに戻って、また向かっていく力を、大人から教えてもらいたいと思うのです。私は学校を否定するつもりはありません。でもほとんどの子どもは、絶対に行かないといけないという状態です。でも、それだけではなくて、他の道も選べるような世の中にしてほしいと思います。そしたら、学校へ行かないとダメな人間になるなんていう考え方がなくなると思うのです。家で勉強しても、学校へ行っても、自分の学習したいことだけ勉強しても、ちゃんと人として認めてもらえるような世の中になれば、私たちももっとニコニコして人間らしく生きていけると思うのです。—

—「今の子どもは冷めている」なんて言わずに、冷めていないと生きていけないような世の中、学校にしてみわらないように、子どもがいきいきと生きていける世の中をつくってほしいのです。そして、人間は自分がやりたいと決意したら実現できる能力をせっかく持っているのに、それを考える時間もないのはとても悲しいことだと思います。せっかく人間に生まれたのだから、私はやりたいことをたくさんやってみたい。でも、今はだんだん変わっているときだと思います。（中略）これからどう変わっていくのか、私はワクワクしています。そしてこれからも自分のペースで進んで行きたいです。私はこの三年間で、とって大切なことを学んだと思います。それはもちろん数学や英語ではなく、人間として大切なことだと思います。そして私は、あのまま学校へ行っていたら、学べなかったかもしれないと思います。それから、またどんどん私自身も変わっていくかもしれないけど、いろんなことを考えながら、ゆっくり進んで行きたいです。—

灰谷さんはこう言っています。「わたしは少女の言い分を、まるごと肯定する立場をとる。」

今回の[ねがいはしては]は、一冊の本の一部を紹介するのみになっていました。しかし、私が今回この内容を取り上げた理由をお察しいただければ幸いです。

そして最後にお伝えいたします。この手紙（内容）は20年以上も前に綴られたものであることを・・・。

今と何も変わらずに重なってしまうことを・・・ 『灰谷健次郎の発言〈4〉』—学校とは— より